

「日々の理科」(第1861号) 2019,-8,13

「8月7日の浅間山の微噴火(5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

2004年の浅間山噴火は、9月1日の最初の噴火から、一か月近くにわたって、断続的に噴火を繰り返した。その時の画像を見ると、噴煙と降灰の関係がよく理解できる。



これは2004年9月15日の噴火の瞬間をとらえた画像だ。東京から遠隔操作で撮影したものである。噴火前から左側(南側)に流れている白煙(噴気)から、この時山頂付近の高度には、北風が吹いていたことがわかる。爆発の瞬間、噴気とはまったくちがう色の、黒い噴煙がほぼ垂直に立ち昇っている。



上の写真から約1分後、噴煙は左側(南)に流され、その噴煙の下には、早くも火山灰や火山礫が降下を始めているのがわかる。この写真からも火山灰は噴煙そのものであることが理解できる。



2004年9月15日とその後の噴火では、噴煙が南に流されたので、軽井沢で大量の降灰があった。写真は新幹線の軽井沢駅のホームである。屋根の下にもかかわらず、ホームが真っ白になっている。



軽井沢駅近くに停めておいた私の自動車も、「火山灰カー」になってしまっていた。その後雨が降ったせいか、灰はフロントにこびりついていて、ウォッシャー液とワイパーでは完全に拭うことができなかった。



これは2009年2月2日の夜間に起きた噴火の、決定的な一瞬である。火口から直接飛び出した噴石が、弾道を描いて山肌に着弾している様子がわかる。この写真は大日本の6年教科書に掲載されている。